

発掘成果をふりかえって 2008

調査名

[太秦地区]

- 1、常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内
- 2、常盤東ノ町古墳群・村ノ内町遺跡・常盤仲之町遺跡

[長岡京城]

- 3、長岡京左京二条四坊六・七町跡・東土川遺跡

[平安京 - 右京城]

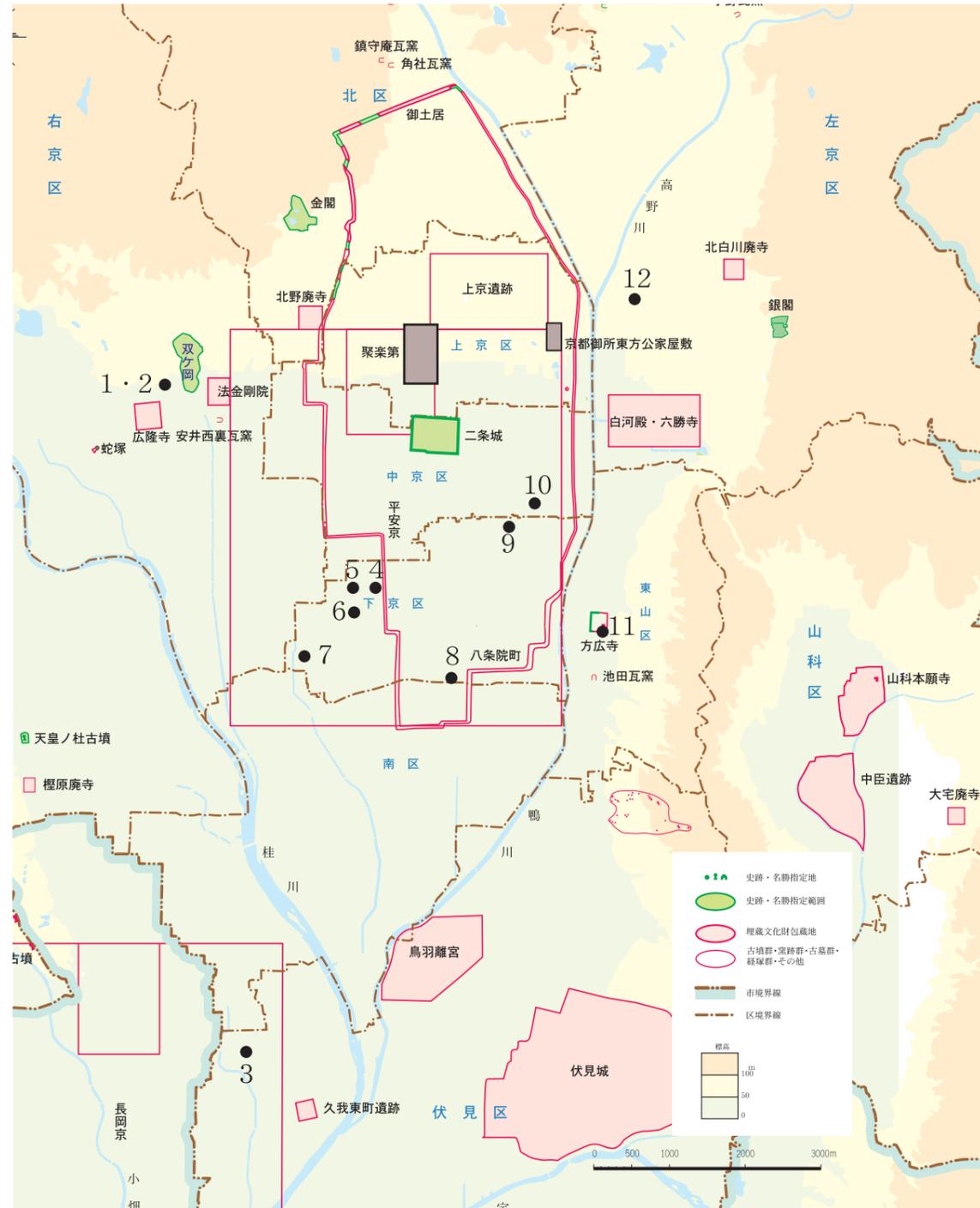
- 4、右京六条一坊三町跡
- 5、右京六条一坊十四町跡
- 6、右京七条一坊十五町跡
- 7、右京八条二坊十町跡・衣田町遺跡

[平安京 - 左京城]

- 8、左京八条三坊四・五町跡
- 9、左京五条三坊九町跡
- 10、左京四条四坊二町跡

[その他]

- 11、方広寺跡
- 12、名勝清風荘庭園



調査位置図 (図番号は調査資料番号と共通)

平安京右京六条一坊十四町現地説明会資料

所在地 京都市下京区中堂寺粟田町

調査期間 2008年10月1日から継続中

調査面積 約2,000㎡

調査機関 (財)京都市埋蔵文化財研究所 (<http://www.kyoto-arc.or.jp>)

はじめに

今回の調査は建物建設に先立って行われたものです。調査地は、平安時代の条坊呼称でいえば右京六条一坊十四町にあたります。平安京全体から見た位置では東西の中央よりやや西側、南北の中央よりもやや南側に位置します。調査地周辺は、これまで数多くの調査が実施されており、平安京の中でも広い範囲で平安時代の様相が明らかになっている地域です。その中の十四町域は、過去の調査と併せてその約半分の面積の調査を実施したことになります。

何が発見されたのか

今回の調査では、主に平安時代前期(9世紀代)の建物遺構が検出されています。10世紀のものではなく、この頃には無住の地になっていたようです。794年に長岡京から平安京に遷都されて約100年間の土地利用が明らかになったのです。建物跡などの遺構は、出土した土器などからみて大きく3時期に分かれます。

I期の遺構としては門状遺構1・2・3・溝36等があります。門状遺構(以下門と表記)は2個の柱穴が1対となった遺構で掘形(柱を立てるための余掘穴)が通常の建物より大きいのが特徴です。門1では掘形の一辺が約1mありましたが、柱そのものの痕跡は径0.2mと比較的細いものでした。

II期の遺構は建物1・5、塀1～3、III期の遺構として建物2～4があります。II・III期の建物は、いずれも比較的小規模なことから宅地のなかでも主要建物ではないと考えられます。そして、これまでの調査成果と併せて今回の遺構をみた時、十四町では、I期とII・III期では土地利用の在り方に大きな変化が存在したようです。

これまでの調査成果と併せてみると

門状遺構が作られる時期(I期・9世紀前半)

平成2～7年の調査と今回の調査で十四町の様子が明らかになってきました。これによると、平安時代の初期(9世紀前半)には一町の中央付近に南北方向の川が流れていたことが確認されています。そして町の東側を中心に今回の門も含めて8基の門が確認されています。またこ

れに伴う柵列などもありますが、建物は見つかりません。

門状遺構の性格はわかりませんが、いずれも宅地の内部にあり門としては不自然です。また、平成4年の調査では今回検出した門1の東側20mと35mの位置で同様の遺構が2基みつかり、これらの3基が川に向かって東西に並ぶことになります。この川では土馬や人面墨書土器などの祭祀に使われる土器や「水取」・「寮」・「厨」銘などの墨書土器が見つかり、祭祀あるいは儀式に係わる遺構かも知れません。

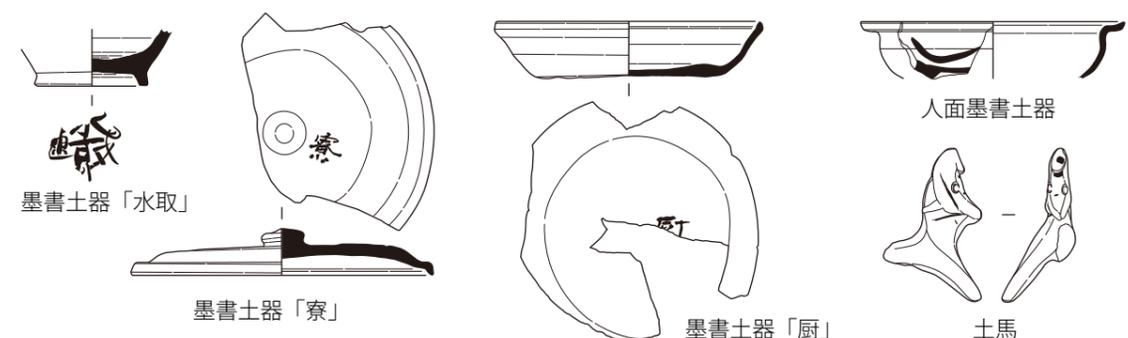
邸宅の時期(II～III期・9世紀中頃から9世紀末)

この頃は宅地として利用されています。平成4年に今回の調査地の東隣で行われた調査では、9世紀後半の邸宅の中心建物となる大規模な建物(SB5)が確認されています。この北側にもいくつかの建物が南北に並ぶようがありますが、建物配置からは南群(SB4・5)と北群(建物5、SB54)の大きく2つに分かれます。南群は、邸宅の主人が生活を行ない、また儀式などにも使用される表向きの空間。北群は、邸宅を維持するための厨房など様々な施設がある裏向きの空間と考えられます。今回の調査で検出された塀1・2、はこの2つの空間を分離するためのものになります。また、十四町の中央を南北に流れる9世紀代の川はこの頃も流れており、邸宅の規模は2分の1町、居住者は五位クラスの中級貴族が考えられます。

まとめ

今回の調査によって、十四町域の平安時代の様相が明らかになってきました。平安時代初期に作られた門状遺構の性格はわかりませんが、何らかの祭祀に係わる遺構の可能性がります。今後、出土遺物や類例を調べて検討することが必要となりますが、興味深い資料です。

9世紀後半の邸宅も、今回十四町の南北の中心部を調査出来た事から、邸宅の規模は2分の1町規模であるとわかりました。この規模の邸宅の建物配置がこれほど明確になった例はほとんど無く、当時の貴族邸宅を考える上で貴重な成果となりました。



平成6年調査(1) 川34出土遺物

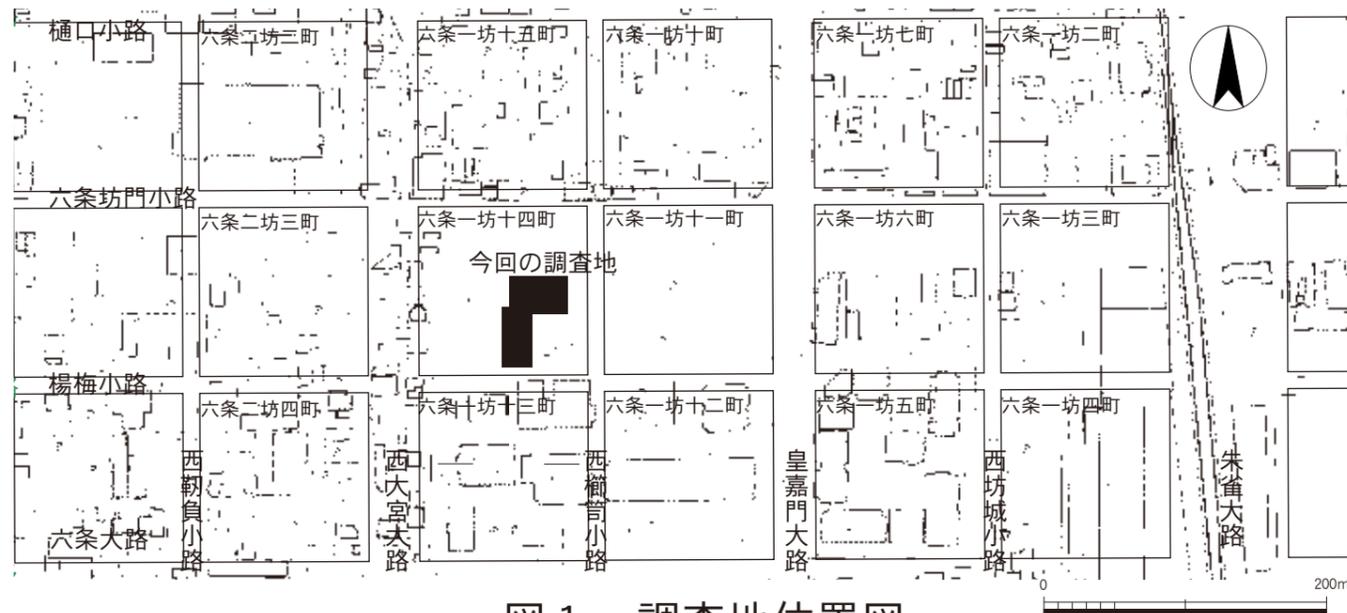


図1 調査地位置図

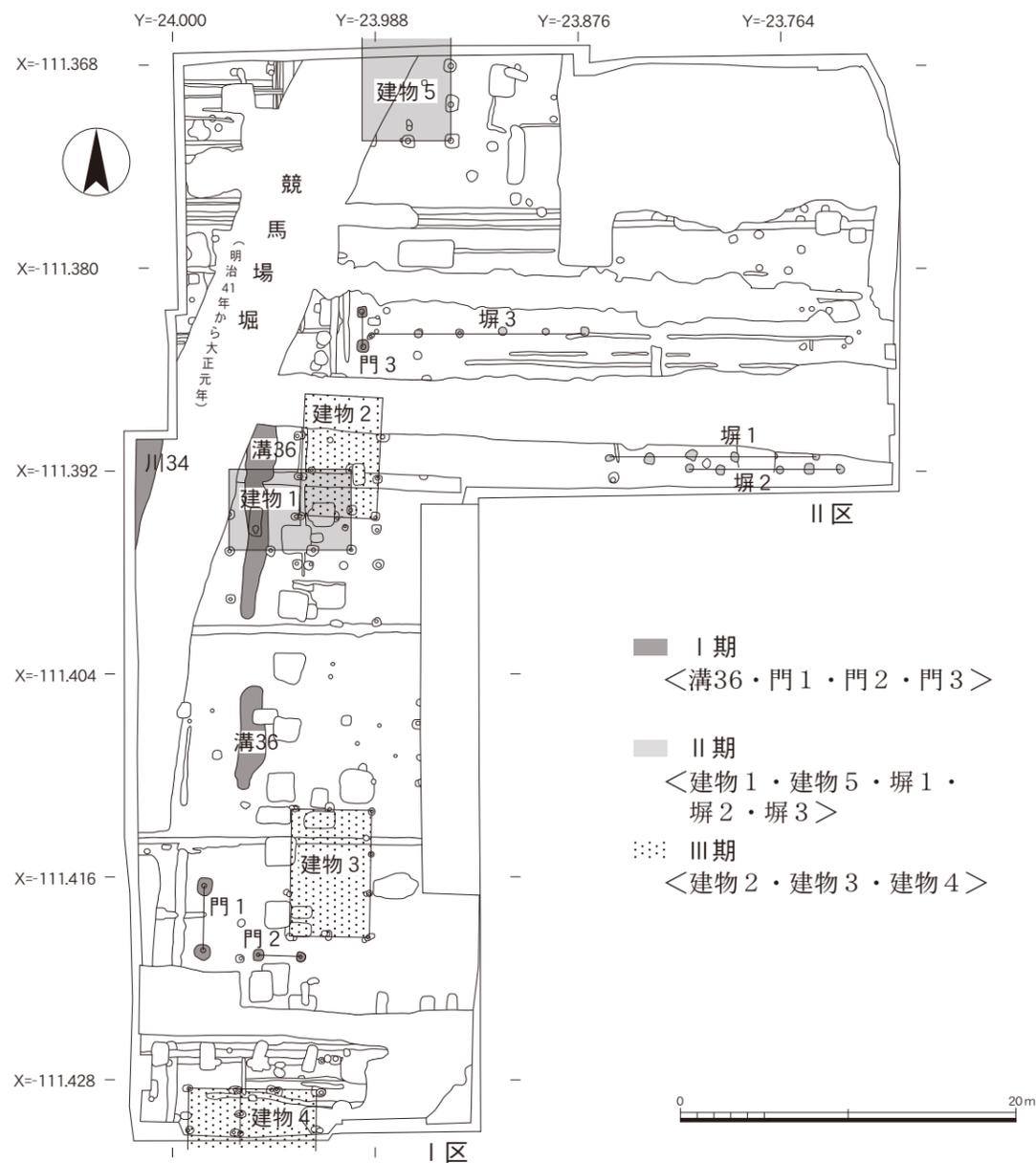


図2 調査区平面図

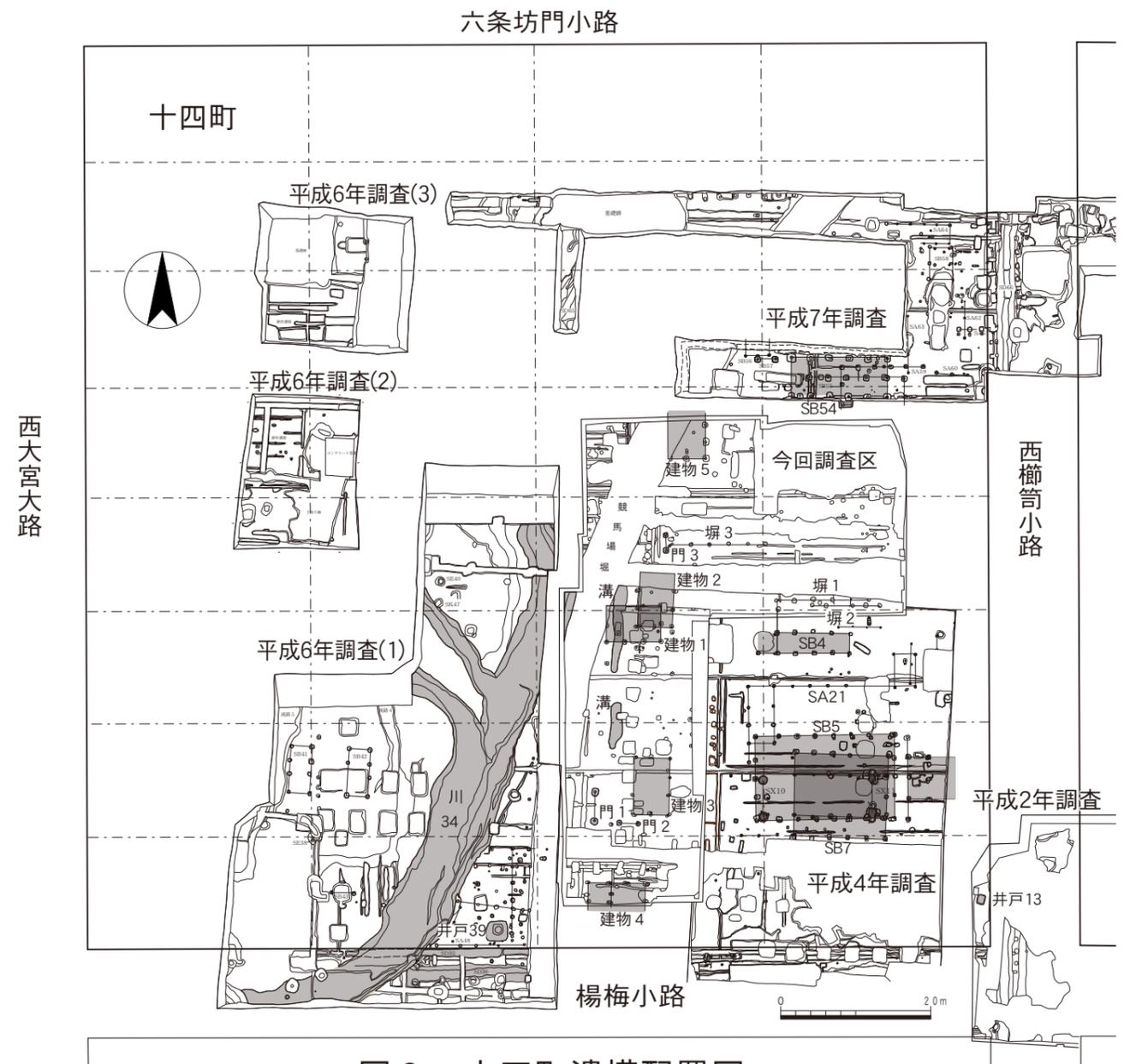


図3 十四町遺構配置図

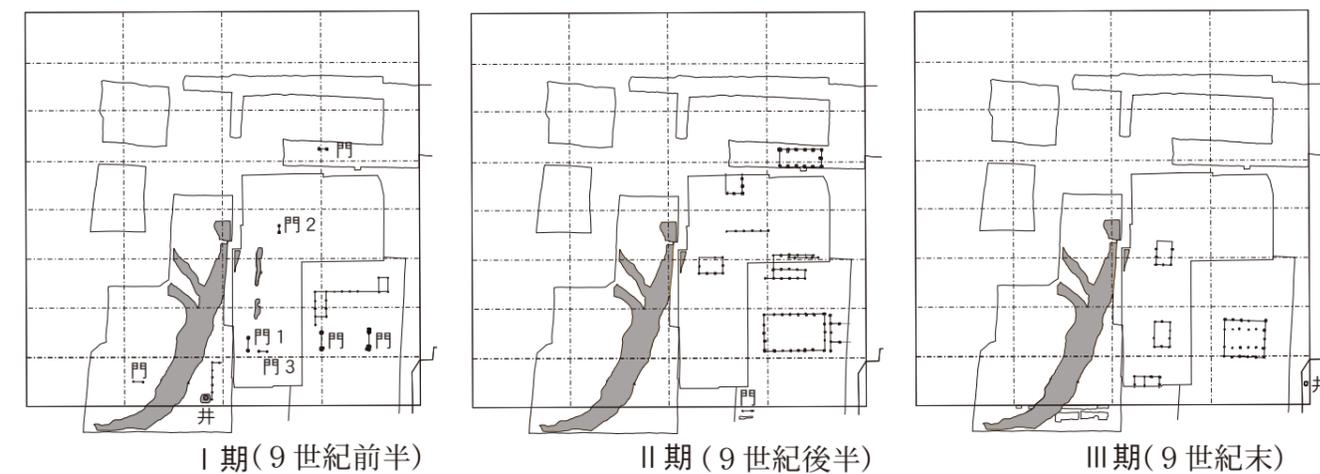


図4 遺構変遷図

平安京右京七条一坊十五町跡現地公開資料

所在地 京都市下京区西七条西八反田町

遺跡名 平安京右京七条一坊十五町跡

調査面積 約 400㎡

調査期間 1月13日～2月19日

調査機関 (財)京都市埋蔵文化財研究所 (<http://www.kyoto-arc.or.jp>)

調査経過 今回の調査は、共同住宅新築工事に伴うものです。京都市文化財保護課の試掘調査によって平安時代の遺構が見つかったため調査を実施しました。調査地は、平安京右京七条一坊十五町東の南端にあたります。

南隣の十四町では、七条中学校の校舎建てかえに伴って、昭和55年度と平成9年度に調査が行われています。ここでは、平安時代前期から中期(9世紀初頭から10世紀)にかけての建物や井戸、西櫛笥小路西側溝や柵列などが三時期にわたって見つかっています。また、昭和55年の調査では弥生時代の方形周溝墓や溝も見つかっています。

調査の結果 調査区東側で西櫛笥小路、西側で建物3棟が見つかりました。

西櫛笥小路の東側溝は推定通りの位置にあり、幅0.8m以上、深さ0.05m、延長15m分が見つかりました。平安時代中期前半(10世紀前半)のうちには埋没しているようです。ところが、西側溝は大きく路面部分に張り出し、河川化していました。河川は幅7m前後、深さ0.4mにおよびます。

調査区西側の十五町宅地内では掘立柱建物3棟が見つかりました。建物は二時期にわたって建てられ、最初に南北5間、東西2間の建物2と3が建てられたようです。この2棟は全く同じ規模で、東西に妻を揃えて並んでいます。柱間は桁行2.1m、梁間2.4mです。柱は直径30cmの太さに達するものもあり、その掘形は1辺50～60センチの方形です。次ぎに建物4が造られました、この建物は東西3間、南北2間の東西棟で、柱間は全て2.4mです。柱は直径10cm前後で、その掘形は直径30～40cmです。

調査地の変遷 今回の調査でわかったことを整理すると、まず、平安時代前期(9世紀中頃以前)に建物2と3が建てられました。その頃には西櫛笥小路も本来の道路として機能していたと考えられます。その後、平安時代中期(10世紀)には、西櫛笥小路の西側溝を拡張する形で河川化が始まったと考えられます。同じ頃には、建物2と3も廃絶したと思われ、その後に建物4が建てられました。河川は平安時代後期(11世紀中頃)には埋没したものと考えられますが、その上に中世・近世を通じて水路が踏襲されたようです。

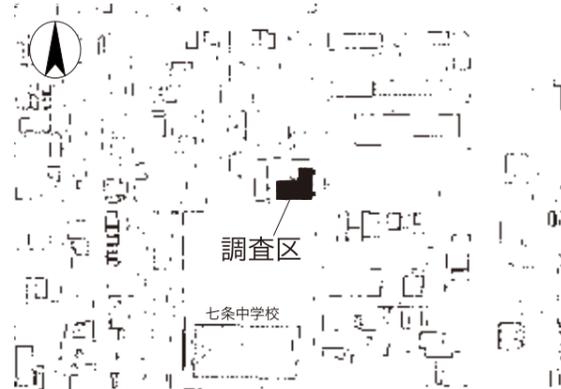


図1 調査位置図



図2 条坊図

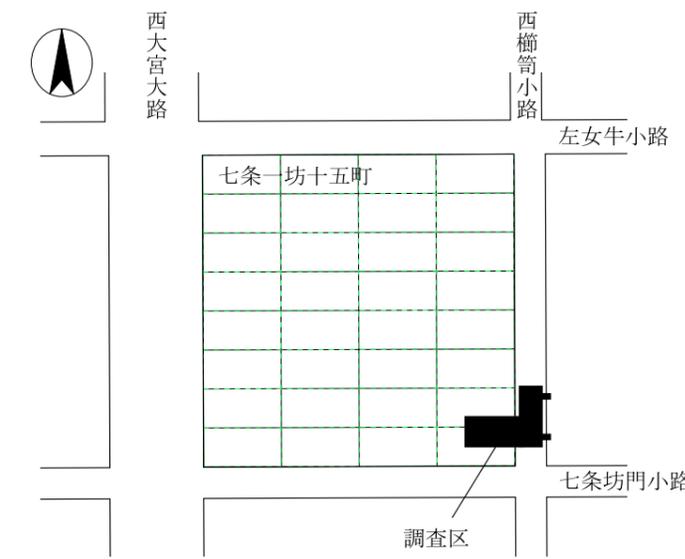


図3 四行八門と調査地

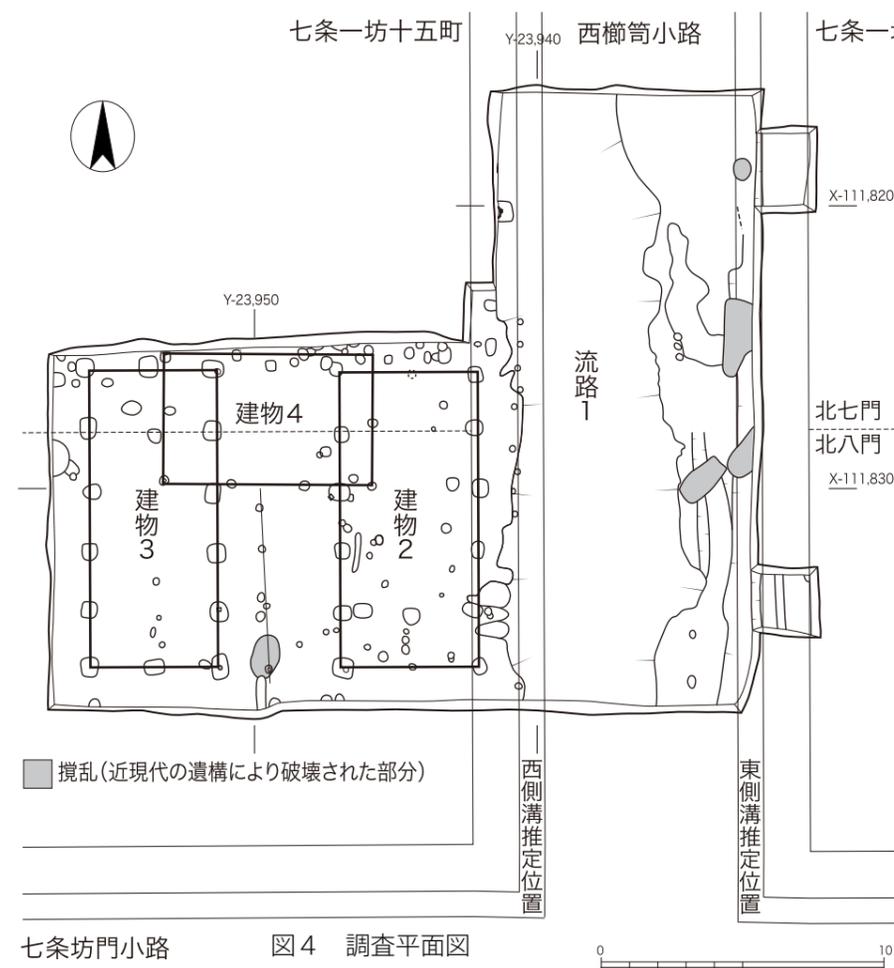
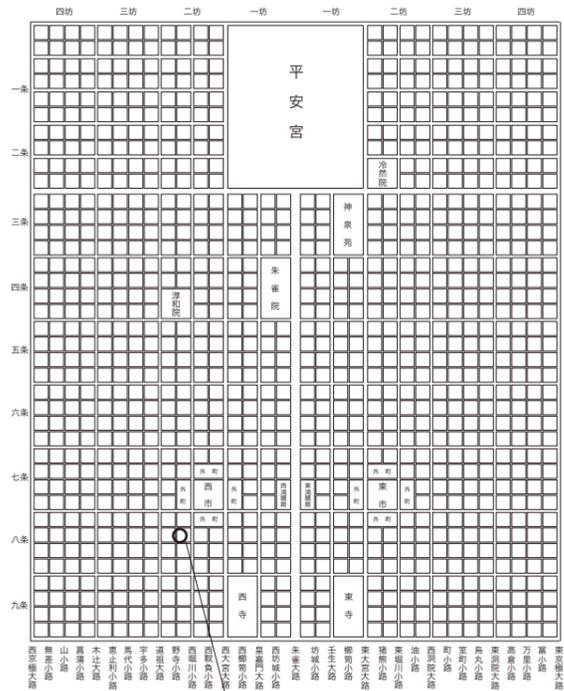


図4 調査平面図

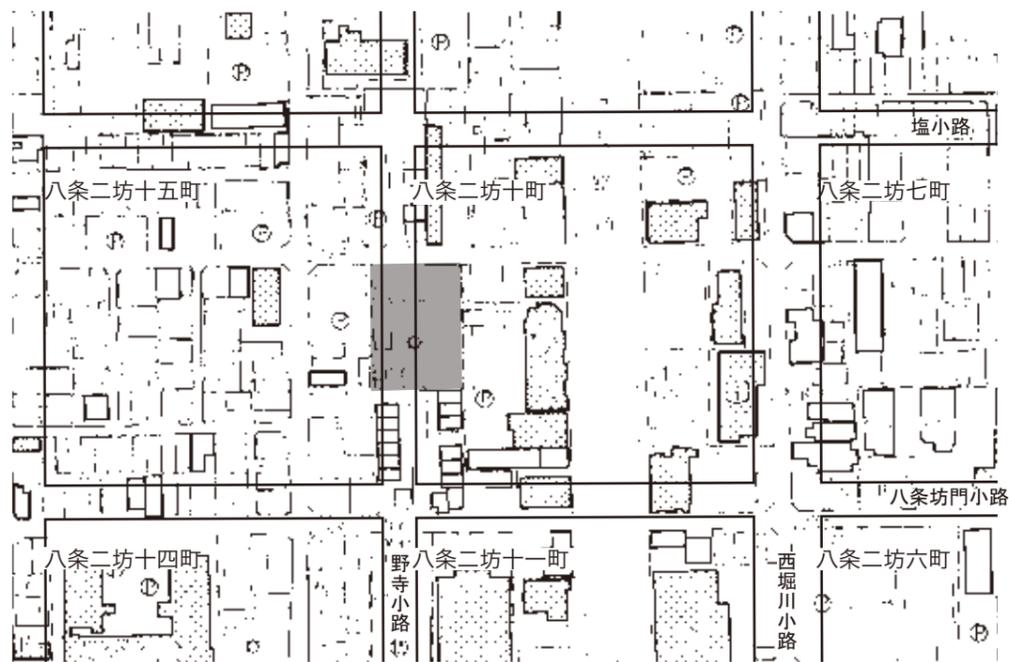
埋蔵文化財発掘調査現地見学会資料

2008年9月5日

遺跡名： 平安京右京八条二坊十町跡・衣田町遺跡
 調査地： 下京区七条御所ノ内北町63-1
 調査面積： 289?
 調査期間： 2008年9月3日 8月18日～9月14日
 調査主体： (財)京都市埋蔵文化財研究所



右京八条二坊十町 平安京模式図 (1:60,000)

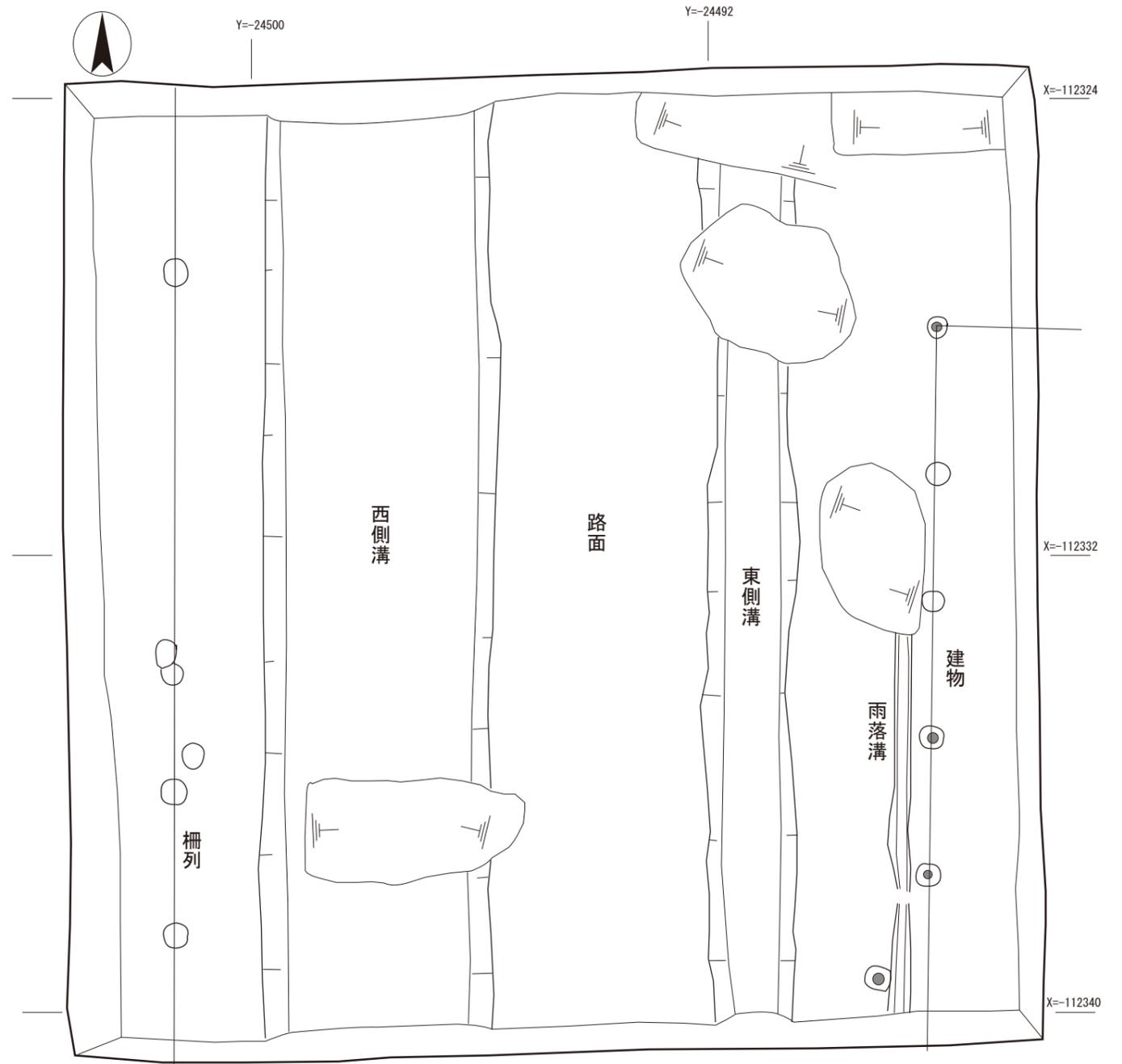


調査地位置 (1:2,500)

遺構の概略:

野寺小路の東側側溝、西側側溝、路面、東側の宅地内で建物跡、西側の宅地に関する柵列などが見つかりました。

東側溝は幅が約1.5m、深さが0.4mです。西側溝は幅約4mで、深さは0.5mです。路面は東西の側溝の間に幅約4mで見つかりました。東側の宅地内からは建物の一部が見つかりました。柱の間隔は2.4mで、柱痕の残る柱穴もみつかりました。西側の宅地に関する柵列も柱の間隔が2.4mで、南北方向にのびています。



調査区平面図 (1:100)

2009年3月7日

方広寺跡現地説明会資料

主催 京都国立博物館・(財)京都市埋蔵文化財研究所

所在地 京都市東山区茶屋町 京都国立博物館敷地内

調査期間 2008年12月8日～2009年3月31日(予定)

調査面積 約910㎡

調査機関 (財)京都市埋蔵文化財研究所 (<http://www.kyoto-arc.or.jp/>)

はじめに

今回の調査は京都国立博物館の平常展示館建替えに伴って実施した調査です。京都国立博物館の敷地内は、平安時代後期には後白河法皇の御在所であった法住寺殿、中世には六波羅政庁の跡地に推定されており、洛東でも歴史の深い場所です。とくに、敷地北側は豊臣秀吉が京都に造営した方広寺大仏殿の南回廊推定地に相当し、過去の調査において南面石塁や南門・回廊跡を発見しています。今回の調査は南門北側の基壇の状況や回廊の東への延長部分を明らかにするとともに、南面石塁の造成工事の痕跡を確認するため調査を実施しました。

発掘調査であきらかになったこと

まず、平成10年に発見した南門の北側において、東西方向の浅い地業痕跡を確認しました。幅約1.5mで、再発掘した南門北側柱の根石から約1.5m離れています。地業周囲には帯状に花崗岩が分布しており、南門北端の雨落溝の石を据えた布掘り地業の痕跡ではないかと考えています。

南回廊は以前の調査で複廊であったことが判明していますが、今回新たに4間分の礎石根石群を発見し、南門から東へ9間分回廊の遺構が残っていることがわかりました。柱間は以前の調査所見と同様に、3.75m(12.5尺)で割り付けられています。そして、回廊内では秀吉が大仏殿の造営にあたって行った土地造成の痕跡を確認しました。調査区東端では地盤層になっていますが、西にいくに従い小さな谷地形などを丁寧に埋めて平場を作っていきます。谷を埋めるにあたっては、あらかじめ水切りの溝を掘って湧き水の処理を行い、南門の東から南へ排水したようです。

南門の位置では約0.7mの盛り土を行っており、さらに西の石塁では盛り土のうえに礫で強固な裏込め地業を行ってました。裏込めの中には、石仏や五輪塔などの石造物が多数含まれています。

造成地業全体としては、地盤層と盛り土の変換点を確認したことによって、大仏殿を建立するのに東側1/3は斜面をカットし、西側は盛り土を行って平場を造成したことが判明しました。ちなみに西側の石塁は高さ約3mあり、単純に計算すると大仏殿の平場全体を造成す

るのに、約55,000立米の盛土を行ったこととなります。これは現在の10tダンプ1万台分に相当し、「天下人」である秀吉の権力の大きさを物語っています。

まとめ

方広寺は秀吉が関白となり豊臣姓を賜った翌年、天正14年(1586)に造営が始まりました。その造営は聚楽第とともに「天下人」秀吉の権力を誇示することを目的としたものであり、5カ年で東大寺大仏殿よりも大きな仏殿と大仏を建立するというものでした。天正16年5月には「京ニハ大仏建立トテ、石壇ヲツミ土ヲ上テ、其上ニテ洛中上下ノ衆ニ餅酒下行シテヲトラセラルル」(『多聞院日記』)として造成事業が行われた様子が窺えます。今回確認した石塁などの地業は大半がこの時のものと思われます。

その後、慶長元年(1596)の大地震によって方広寺の大仏と築地は大破し、権威のモニュメントの完成をみることなく秀吉は亡くなります。方広寺の再建は秀頼が受け継ぎ、この時に大仏殿とともに築地が回廊に建て替えられたようです。洛中洛外図などには回廊は単廊として描かれているのに、調査で確認した回廊は複廊であり、格式が高かったことを窺わせます。しかし、慶長7年(1602)またしても大仏建造中に火災にあい、方広寺は焼け落ちてしまいます。

そして、慶長13年(1608)には、秀頼による二度目の再建が企画されます。豊臣氏の財力を浪費させる徳川家康の策略でもあり、「国家安康」「君臣豊楽」の梵鐘銘が問題となり、豊臣氏の滅亡に繋がる逸話はあまりにも有名です。方広寺の歴史はまさに豊臣氏落日の歴史でもあったのです。



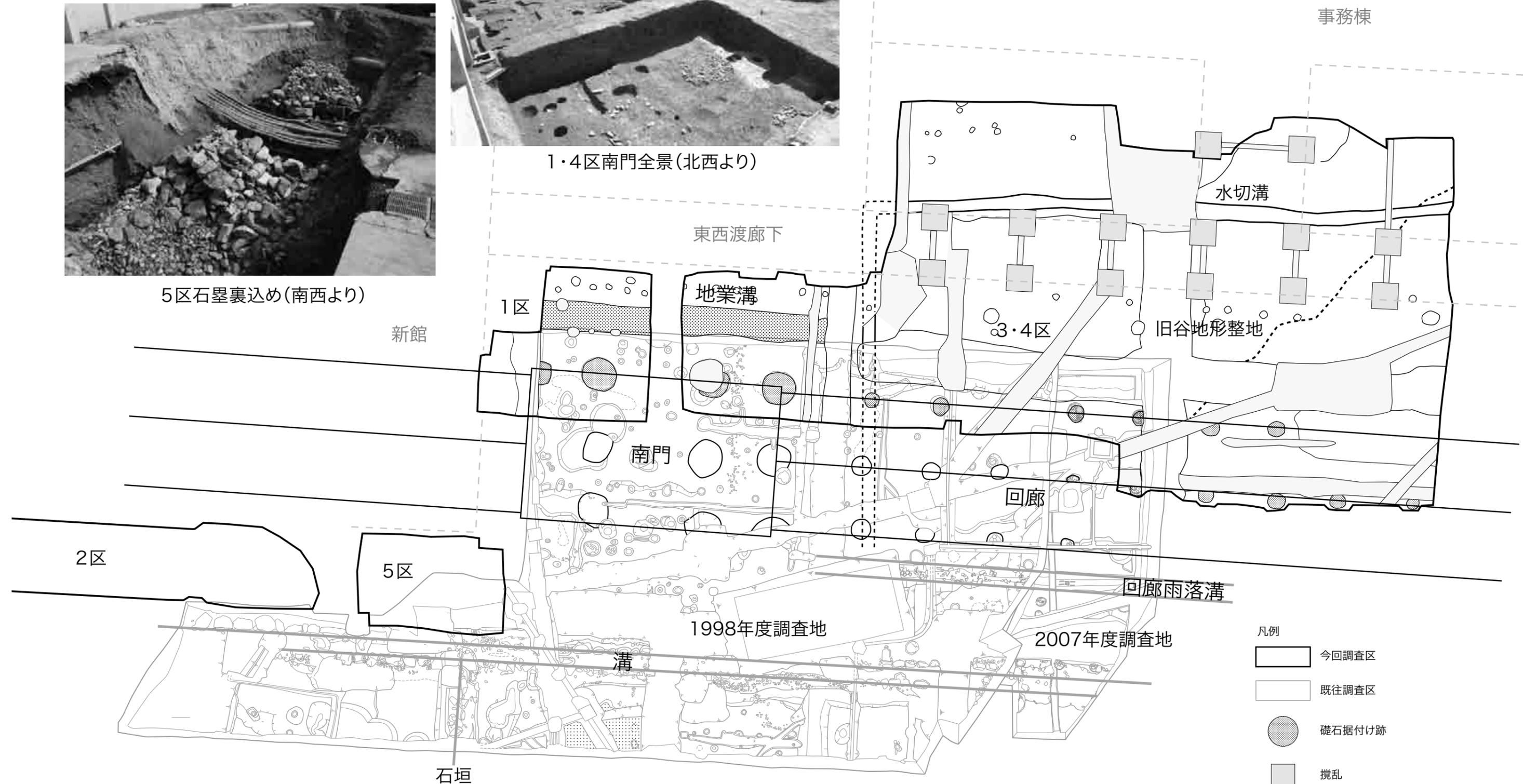
回廊跡全景(東より)



5区石塁裏込め(南西より)



1・4区南門全景(北西より)



方広寺南門・回廊調査平面図

2009年3月18日

清風荘現地公開資料

—清風荘庭園の整備に伴う埋蔵文化財試掘調査—

遺跡名：名勝 清風荘庭園

所在地：京都市左京区田中関田町

調査期間：2009年2月～2009年3月

調査機関：財団法人京都市埋蔵文化財研究所

遺跡の概要

京都大学清風荘は、西園寺公望^{きんもち}が控邸として使用した和風庭園をもつ建物群で、江戸時代末期建築の茶室、大正建築の主屋や離れなどの数寄屋建築は国の登録有形文化財に、庭園は名勝に指定されています。この庭園は明治44年（1911）から5年がかりで、7代目小川治兵衛が作庭したもので、明るく解放的な芝生の広場から望む大文字山、池の周囲に植えられた赤松やカエデなど建物とともに落ち着いた空間を形成しています。小川治兵衛は「植治」と呼ばれ、近代造園の先覚者として、明治時代後期から昭和初頭にかけて全国的な展開を見せ数多くの庭園を作りました。主な庭園に京都では山県有朋^{ありとも むりんあん}の無鄰庵・対龍山荘^{たいりゅうざんそう}・有芳園^{ゆうほうえん}・白河院庭園^{なみかわけ}・並河家庭園・平安神宮「神苑」・円山公園などがあり、京都以外では慶沢園^{けいたくえん}（大阪市）・旧古河庭園（東京都）・有隣荘庭園^{ゆうりんそう}（岡山県）などがあります。



庭園から見た主屋

調査の成果

今回の試掘調査は庭園の整備に伴うもので、園の東側を中心に、現在埋没している池の取水口や流出口、園路や築山の状況確認、北側にあるモルタル製構造物の性格確認などを目的に、7箇所の調査区を設けて実施しました。

以下、今回の調査で発見した主な遺構を調査区ごとに紹介します。

2-1区 モルタル製構造物は、赤煉瓦を積んで表面をモルタルで仕上げたもので、幅約35cmの帯がいくつかの方形区画を形成しています。調査によって地表から約1.2m下で底を見つけ、導水管が配置されていたことから水槽であることがわかりました。

また、水槽の東側では池を見つけました。この池は切石を組んだ上にコンクリートで作られています。取水口は見つかりませんが、清風荘の北に流れる太田川（現在は暗渠となっている）から水を引いていたと考えられます。

2-2区 水槽からの流出口と水路を見つけました。水路の両壁は赤煉瓦をモルタルで巻き、底はコンクリートで作られています。流れ出た水は中央の池に注ぐようになっていました。

3区 モルタルを巧みに使った池の護岸を確認しました。

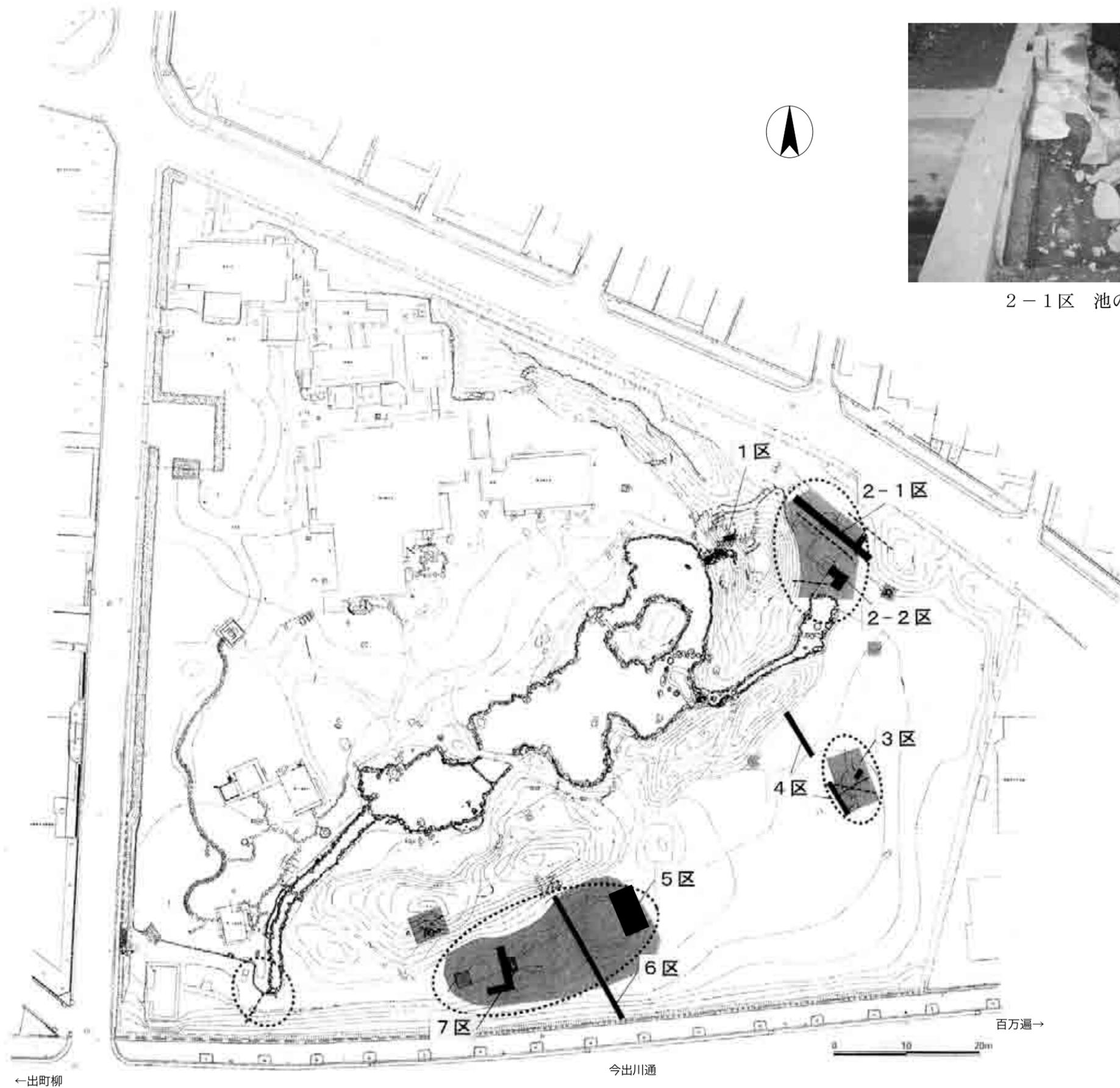
4区 園路を見つけました。園路には細かい礫が敷き詰められていました。

5区～7区 現在窪みとして残る旧池の調査です。5区では旧取水口である導水管を2本発見しました。導水管の下には粘土を貼り付け、水受けの石が据えられています。北側を断ち割ったところ、池の護岸を検出しました。

6区では南側の築山は近年に積まれたものであることがわかりました。

まとめ

今回の調査は比較的新しい時期の文化財庭園を対象としたものですが、当初の目的通り、旧池の取水口や流出口、園路や築山の状況が確認できました。こうした庭園の調査にも考古学的手法が有効であることが証明できたことは大きな成果と考えられます。



2-1区 池の検出状況



2-1区 水槽全景



2-2区 水槽流出口



5区 取水口と受け石の状況